

# 彫刻内空間の研究—制作を通して考察する—

大阪芸術大学 教養課程 講師 加藤 隆明

彫刻内空間の研究では、物質が塊としてありそれに対し知覚や想像力を駆使して探る空間という概念と、彫塑のように現実に空洞化している空間に制作者や鑑賞者の概念そしてまなざしというものを考えました。そして、その空洞化した内空間をコンセプトとして制作していきました。

まず、2020年12月・大阪 gallery gekilin(ゲキリン)にて発表した作品の展示説明、作品解説、コンセプトに大枠分けて説明します。大阪 gallery の作品展示では展示空間をどのように構成するのが重要なことでした。展示する作品は「繭」と「殻セミと真珠」の二作品です。「繭」は蚕の繭を2500個程度使用した床置き作品で「殻セミと真珠」は脱皮した蟬の殻と真珠を組み合わせた作品です。この2つの性質の異なる展示配置が重要な要素でした。作品の要素からホワイトキューブという概念でとらえられている現代アートギャラリーの空間の要素を展示に、どのように取り入れるかを考察していきました。

結果、繭は長さ5000cm、幅2200cmで片方が半円でそちらのほうに少し幅をすぼめた形を想定し、幅の一方は高さ5cm、もう一方の高さは2cmと少し傾きを持った台座あるいは繭作品の舞台を用意しました。

台座あるいは舞台を用意するとはいえ、インсталレーション的要素がありギャラリー空間のその時の質感を無視して「繭」の作品は成り立ちません。作品を照らすスポットライトの色は昼色に限定し7本用意、台座の白い色彩を反射し、白い壁により淡い空間を生み出す効果を生むようにしました。また、縦横の壁と床の作品台座の関連にスムーズに鑑賞者の視線が動くようにするために「殻セミと真珠」は壁の高さ2000cm以上の場所に配置したいと考えていました。一つはセミということで鑑賞者が見上げるような方法で作品鑑賞を考えました。「繭」が床から8cm程度に作品が納まるので鑑賞者の視点を、天井部分に移させたいと考えギャラリーの床と天井部分を展示空間とし、壁には極力視点がいかないようにしました。このような展示はあまり経験がなく、上下の重力体験も感じられました。これは、生物を素材にする作品としては重要な環境だと思われれます。

## 制作方法について

### 「繭」作品について

使用している繭は市販されており、そこから購入しています。まず繭を縦割りにカッターを入れ半分にします。全部切り離すのではなく一部繋げておき、帆掛け船あるいは口が開いた貝のイメージに作ります。

当然繭内には蛹がいます。それはすでに乾燥しているか、溶けて繭内側に痕跡がある状態となっており、それを繭から外します。その後内の空間を見せた繭に鉛を貼ります。鉛の性質は柔軟性があり常温で他の素材の形に寄り添うことができます。鉛のシートから繭の大きさ4cm×2cm程度の矩形に鋏で切り取り、繭の一つの凹に鉛をはめ込み接着します。後は、はみ出した鉛は鋏で切ります。それを展示空間に適切だろう数

を制作していきます。

### 「殻セミと真珠」作品について

脱皮したクマゼミの殻を使用し、割れた殻の背に真珠を一つ埋め込んだ作品です。殻セミはネット上で販売しており、その中で作品に適切なものを選択しました。

殻セミは非常に壊れやすく長期の展示にはそぐわないので、この素材を硬化するためにいろいろ試すことになりました。スプレー式の接着剤やマネキュアなど、しかし、それらは殻セミの6本の脚を硬化維持するまでにはいきませんでした。現在、一番適切と思える接着剤は紫外線硬化剤です。2液樹脂では硬化中高い熱を出すため殻セミの形態が維持できません。現在はこのような制作手順で行いました。

### 台座・舞台について

二つの作品に重要なのは台座・舞台です。「繭」作品は220cm×500cmで高さ(5cm~2cm)で一方の端が半円でそちらに向かい全体に狭めている不規則な形をしています。人間の舌を連想するように制作されているのとギャラリーの空間配置を意識したための形体です。

台座が白色で繭の白さと鉛色の対比で非現実的な空間を作ることができました。

「殻セミと真珠」の台座は10cm×10cm角でアクリル鏡の上に同じ大きさの2mm厚のラバーを置いて作品の影に深みを作りました。効果として向こう側にもう一つ殻セミがいるように感じられるとの感想が聞けました。

### コンセプト

作品は双方とも内と外の空間の質の差でできています。過去の作品「Pigskin(豚真皮)」素材の作品は彫刻として制作してきました。彫刻としての特性である塊概念の喪失と同時に表皮・表面の重要性があります。半透明で制作された作品の空間意識は不在感です。透過した風景は3次元や重力の喪失を感じられますがここには外と内の異質さは感じられません。外内が感じられない空間を生んでいて素材さえもその中に含まれてしまいます。

今回の「繭」と「殻セミと真珠」の空間性は双方の異質さにあります。素材が「繭」に移行してから内と外の空間が異なり内は特殊化します。内と外の質を明確に分けるのは繭であり殻です。それは人にとって子宮と同質の性格を持ちます。内にて生存し変身しその後外にて生存します。その逆はありえません。常に生死という相容れないものが混然とする世界です。たとえば植物の年輪は生きた時間のしるしですが年輪として現れる線は細胞が死んだところです。生と死が同居するものです。

詳しい写真等の資料とレポートは後日提出資料に記述します。